

分散会の概要

〔第三分散会〕 地域教育懇談会活動の交流

子育てでは、 親の悩みは共通だ！

片岡 弘

参加者のプロフィール

分散会は、参加者の簡単な自己紹介から始まった。

青森二、山県二、福島二、神奈川一、東京一、滋賀一、新潟七、合計一七名の参加である。

所属または職業別では、民研関係四、農協労働者一、教員(小・中・高)六、研究者一、大学生二、その他「日本子どもを守る会」の理事、大学で放射線を教

えながら地域で「保育問題連絡会」の仕事もしている人、退職教員で地域の「教育を考える会」を組織している人などである。ついでに例えば男一三名、女四名という構成であった。

参加者たち(学生を除いて)が地域で組織している活動の母体は、「子どもを守る会」「教育懇談会」「子どもの人権と体罰を考える会」「民主教育をすすめる会」「(組合)婦人連絡会」「演劇運動」「おやこ劇場」「保育運動連絡会」等々実に多彩である。

「子どもの人権と体罰を考える研究会」の全国シンポジウムに多くの人が集まった。しかしこれだけでいいのだろうか……わたくしは、住んでるところで何かやらないと気がすまないんで、「子どもの人権を守る会」というのをやっている。以前静岡に住んだときには「わらしな地域教育を語る会」というのをやっていて、かれこれ二〇年、それが今でもつづいている……」(牧井東京民研)。「婦人労働者のいちばんの関心事は教育だ。教育って何だろうか……子どもといっしょに学びながら自分も高まっていくことではないか。労働組合運動のなかにも子どもの教育問題をとりあげていきたい」(今井農協労連)という自己紹介での発言はたいへん印象的であった。

かしわざき教育懇談会のこと

加納マスキさん(新潟県作文の会)からの話題提供は「かしわざき教育懇談会のこと」。要旨は次の通りである。

①県民教育研究所からの要請もあって、柏崎市内の会員が集まってこの会をスタートさせた（八九・二・二七）。教員、元教員、市会議員、主婦など、当初一〇人ほどが参加した。自分にとっては、教員以外の人と交流できるたいへんよい機会である。

会員相互が親しくなることを目的に、年三〜四回の勉強会を持つ。ゆくゆくは、多くの市民に参加を呼びかけて大学習会を開こう……ということを出発した。

②第一回の学習会では「登校拒否」「未満児保育」をテーマに、木村隆利（県民教育研究所）・内山かおる（ななかよし保育所々長）両氏のお話を聞き、語り合った。「柏崎日報」が催しの案内を報じてくれて、それをみて来ましたという人もあって三三人の集まりとなった。

③登校拒否児を持つ親のすがるような訴えを聞き、当初は年三〜四回の会と考えていたが、「登校拒否を語る会」を別枠

で月例化し、教育相談にも応じることにした。ただこの会をどう発展させるかは今後の課題である。

④「にいがた食と農と健康・教育ネットワーク」から、柏崎でも学習・交流会が持てないかとの誘いがあった。農協労連とタイアップ。厚生連・新婦人・子ども劇場・市民生協等九団体に呼びかけ、目下学習会を定期的に開いて、目標の「市民大学学習交流会」を準備中である。

継続は力なり

報告のあと、参加者からもそれぞれが取りこんでいる活動の実際が話された。

「子どもの生活の崩れ、登校拒否、学力問題等子どもをめぐる状況は、青森も新潟も東京も変わらない。親の悩みは共通だ」（青森）。親たちのそうした切実な悩み・要求に根ざして「懇談会」を続けることが大切だと強調された。しかしそうした会を継続していくことの難しさ

や、一年一回の七夕集会でいいのかという反省も出された。中学校区単位くらいの規模で、親が集まってホッとできるような会がいい。「算数教室」などにはずいぶん集まってくる。そこで「内申書って何だろう」というテーマを設定したら参加者がぐっと減ったという話。また、子どもの人権問題では学校の壁が厚く、一般的なテーマでの運動はできるが、個別の問題になると学校との対応が難しいとの指摘もあった。行政も同様で、そこに直面すると、ともしれば、無力感に陥りがちだが、「継続こそが力だ」（東京）とは参加者の一致した到達点であったと思ふ。

日程の都合で時間に追いかけるような分散会だったが、「ゼミの教官からすすめられ」しづぶが参加したという様子だった学生の、「（卒論には直接役立たないが）参加してたいへん勉強になった」という最後の発言がうれしかった。（かたおか ひろし）にいがた県民教育研究所